登場人物（物語開始時点）

早坂　恵：農学部、花岡研究室三回生
瀧川　亮：農学部二回生
花岡　幸康：農学部教授、六十三歳
秋田　美雪：農学部、花岡研究室三回生
立木　祐介：農学部二回生、亮の友人
伊達　俊也：農学部二回生
菊池　風太：農学部、花岡研究室三回生

秋

一　大学の植物園（温室）

花にあふれた植物園の温室の中に、淡い緑のワンピースを着た恵がたたずんでいる。温室の外から漂ってくるキンモクセイの甘い香りに顔をほころばせながら、恵はパンジー、ビオラ、マリーゴールドなど、色とりどりの花に水をやっていった。手に持つガラス製のジョーロに花の色が映っている。やがて水をやり終えた恵は、ジョーロを手にしたまま何も植えられていない花壇の前へと進み、その土をしゃがんで眺め、微笑んだ。

二　植物園（温室の外）

研究室訪問に来た二回生六人を率いて美雪が植物園を説明して歩いている。二回生の中には亮と祐介の姿もある。

美雪「えー、ここがうちの研究室が使っている植物園です。先生のご専門は花の品種改良ですが、研究に必要な花以外にも先生や学生の趣味で勝手に花を植えていて、いつのまにか秘密の花園みたいになっています」

二回生女子A「へぇ、うちの大学にこんなとこあったんだね」

二回生女子B「きれいだね～」

美雪はぶつぶつ説明を呟きながら足早に歩いていくが、後ろの二回生は周りを見回しながらゆっくりとついていく。そのさらに後ろから、亮と祐介がついていっている。

祐介「亮、興味ないの？」

亮「え？　まあ、お前の付き合いで来ただけだしな」

祐介「でもけっこう乗り気だったじゃん」

亮「ここの教授、単位緩いんだろ？　卒業できれば、研究室とかどこでもいーよ」

祐介「お前は大学に何しに来てんだよ。まあいい、同じ研究室にいれば俺が卒業させてやる」

亮「ハハ、ラッキー」

温室の前を通り過ぎようとしたところで亮が足を止めた。

視線の先には花に水をやる恵の姿がある。
祐介は少し歩いたところで亮がいないことに気づき、振り返って亮に声をかけようとして、やめた。
立ち尽くして何かを見つめる亮の視線の先に、祐介も目をやる。
そこで美雪は二人が遅れていることに気づき、少し離れたところから声をかける。
美雪「そこの二人、大丈夫ー？」
亮と祐介は、我に返ったように美雪の方にパッと顔を向けた。
祐介「すみませーん、大丈夫ですー」
祐介は美雪に返事した後、亮を振り返る。
祐介「おい、亮、行くぞ」
亮「あ、ああ、悪い」
亮は歩き出して、もう一度温室をチラリと振り返ってから祐介に走って追いついた。

三　学食

亮と祐介、二人でカレーを食べている。
亮「俺、あの研究室にするわ」
ぽつりと呟いた亮に対して、祐介が驚いて顔をあげる。
祐介「俺、まだもうちょっと他のも見るけど」
亮「そっか」
亮は最後の一口を食べて、食器を持って立ち上がる。
祐介「え、ちょっ」
祐介も急いで食べきり、亮の後を追いかけた。
祐介「亮、お前研究室どこでもよかったんじゃ」
亮「気が変わった」
祐介「ひょっとしてさっき――」
亮「このあとバイトだから、三限のレジュメとっといて」
言い残して亮は去っていく。
祐介はトレーを持ったままぼんやりとその姿を見送ったあと、手元のトレーに気づいて返却した。

春

四　研究室

花岡研究室の新三回生が部屋の中に続々と入ってくる。
部屋の中には研究室らしく本などが乱雑に積み上げられているが、たくさんの飾られた花とその甘い香りに満ちていて、ちょっと素敵な空間になっている。

そんな空気に気圧されそうになりながら、亮も研究室に足を踏み入れた。
美雪「三回生はそこ、座って」
美雪に促されて新三回生がおずおずと二脚のソファに分かれて座る。
三回生は全部で五人。亮以外は控えめで可愛らしい女の子が三人と、いかにも単位目当てっぽいいかつい男子（伊達）が一人。
菊池「先生、新三回生が来ましたよー」
人のよさそうな細身の菊池が研究室の奥にある教授用の部屋に声をかけると、小柄で白髪の教授が姿を現した。
花岡「君たちが新三回生ですか。ようこそ、花岡研究室へ」
穏やかに微笑む教授はパイプでもくわえていそうな雰囲気のあるおじいさんで、緑のベストに黄土色のネクタイ、焦げ茶色のジャケットとズボンという出で立ちをしている。
花岡「今年は五人も入ってくれて嬉しいですねぇ。うちは今四回生が三人と、ときどき顔を出す院生が三人所属しています。みんな自由に研究していますが、困ったことがあったら相談してくださいね」
亮は花岡の話を半分聞きながら、きょろきょろと研究室内を見回した。今は花岡の横に立っている美雪と菊池以外に先輩の姿は見えない。
花岡「瀧川君、でしたか。どうしました？」
亮「あ、いえ……。素敵な研究室だなと思って」
亮が控えめに言うと、花岡は満足げに笑った。
花岡「自慢の花がたくさんありますからね。植物園もいいですよ。そういえば、早坂君は今日も植物園ですか？」
花岡の言葉に反応して、亮は顔をあげる。
美雪「ええ、たぶん。彼女は、こういう場は好きじゃないでしょうから……」
花岡「そうですねぇ」
美雪の言葉を受けて、花岡は少し寂しそうな、亮は少し怪訝な顔をした。
花岡「今日はみなさん、この部屋の本や花をゆっくり見ていってください。植物園にもいつでも行っていいですからね」
花岡はそう言い残すと、ゆっくりと奥の部屋に帰っていった。
三回生の女子たちは楽しそうに部屋の花を眺め、伊達も意外と熱心に本を手に取って読んでいる。
亮はソファに座ったまましばらく考え込んだ後、荷物を手にそそくさと部屋を出ていった。

五　植物園

亮は辺りをうかがいながら植物園の中を歩いていく。

春の植物園ではチューリップやラベンダーなど美しい花々が咲き乱れている。

亮が温室の中をのぞき込むと、恵は秋と同じように花に水をあげていた。恵の顔にはこの上なく幸せそうな微笑みが浮かんでいる。

亮はその恵の姿にしばらく見入った後、扉を開けて温室に入っていった。

亮が近づいていっても、恵は鼻歌を歌いながら上機嫌に水やりを続けている。

亮「あ、あの」

亮が思い切って声をかけると、恵の鼻歌と動きがピタリと止まった。

亮「早坂、恵さん、ですか？」

恵は驚いたように一瞬亮を振り返る。

恵「ごめんなさい」

恵はそれだけ言って亮の横を通り過ぎた。その顔からはさっきまでの笑顔が消えている。

亮「いや、あの、ちょっ」

恵は亮の声を振り払うように足早に温室を出ていった。

亮は呆然とその姿を見送った後、恵が通り過ぎた場所にバレッタが落ちているのを見つける。そしてそのバレッタを拾い上げてじっと見つめた。

六　食堂

亮と祐介が親子丼を食べている。

祐介「研究室、どうだった？」

亮「別に、フツー」

祐介「亮が俺と別の研究室行くとは思わなかったよ。単位ちゃんと取れんのか？」

亮「教授優しそうだし、大丈夫だろ」

祐介「やっぱあれか？　研究室訪問のときに一目惚れでもしたのか？　確かにあの温室にいた人美人だったよなー。でもまさか亮が一目惚れで研究室選ぶとはなー」

祐介は一人で話しているが、亮はさっき拾ったバレッタの大きさに指を開いて、独り言を呟く。

亮「なんっかおかしいんだよなー」

祐介「おい亮、聞いてんのか」

祐介は亮の肩を小突く。

亮「別に、一目惚れとかしてないよ」

祐介「聞いてたのかよ……」

亮「人のこと詮索する暇があったら、お前こそ一目惚れしたゼミの子頑張れよ」
祐介「なっ……、違うんだよ。俺のはもっと大事に大事に育てる必要があるんだよ。これはちょっとやそっとで終わっていい恋じゃないんだ。だから……」
亮「はいはい頑張れー」
亮は祐介の話を聞き流して席を立つ。祐介もガヤガヤ言いながら亮についてくる。
亮「明日も行くしかない、か」
亮と祐介はいつものように食器を返却して食堂を出た。

七　植物園

亮が温室をのぞくと、花壇の前にしゃがみ込む恵の姿がある。
亮は温室の前でひとつ深呼吸して、扉を開けて中に入った。
亮「早坂さん」
声をかけられた恵は昨日と同じように顔がこわばり、温室を出ていこうとする。
亮「ちょっと待って」
亮はその腕を掴んで恵を引き留めた。
亮「これ、昨日落としてたんで」
バレッタを差し出すと、恵は亮をチラリと見てからバレッタに手を伸ばした。その動きのぎこちなさから、亮は恵の腕を掴み続けていたことに気づく。
亮「あ、すみません」
亮は恵の腕をそっと離した。
恵「ありがとう」
恵はバレッタを受け取ると、また歩き出そうとする。
亮「あの」
亮の大きい声に驚いて、恵は立ち止まった。亮も思ったより大きな声が出て自分に驚く。
亮「俺、間違ってないですよね？　あなた、早坂恵さんですよね？」
恵は振り返らずに、そのままコクリと頷いた。
亮「俺、瀧川って言います。俺のこと、知りませんか？」
恵「……ごめんなさい」
恵はそう言い残して走り去った。
亮「あ、待っ」
亮が恵を呼び止めようと差し出した手が空を切る。その手を握りしめ、開いてから、亮は恵が眺めていた花壇の前にしゃがんだ。
そこにあるのは、小さな芽を出したばかりの何の変哲もな

い植物。
亮「お前はあの人と話せるのかー？」
植物に呼びかけても当然何の返事もなく、ただ静寂が亮を包む。
亮「はぁ」
亮のため息だけが静かな温室に響いた。

八　亮の下宿

暗い室内で、亮が机の上で大きなアルバムを広げて読んでいる。何ページかめくったところでアルバムの上を滑らせる手を止める。
亮「やっぱり……」
静かな部屋に、遠くの救急車のサイレンの音が聞こえる。

九　研究室

美雪と亮が研究室の本棚を整理している。
亮が本棚の高いところ、美雪が低いところに本を並べていく。
亮「この本ってここでいいですか？」
美雪「あー、それは一個下の段。あ、その隣の本教授が読みたがってたから下ろしといて」
亮「わかりました」
亮は青い革表紙の本を取って美雪に渡す。
美雪「瀧川君たまたま来ただけなのにごめんね、手伝わせちゃって。でもおかげで助かったわ」
亮「いいですよ、暇なんで。でも秋田さん、いつもこんなことしてるんですか？」
美雪「まあ私のお節介だからね。教授ってあの年なのに未だに脚立使って本棚から本取ろうとしたりするんだけど、なんか危なっかしいから、私が代わりに本棚の整理してるの」
亮「偉いっすね」
美雪「教授には元気でいてほしいからねー」
亮と美雪は、しばらく黙々と本棚の整理を続けた。
亮は「早坂」と書いた付箋が付いている本を見つけて手を止める。
亮「早坂さんって、いつも植物園にいるんですか？」
美雪「そうねー。早坂さん、新種の花の開発に命かけてるみたいだから。逆に言うと、花にしか心開いてない感じ」
亮は本から、淡々と話す美雪に目をやる。
亮「早坂さん、昔からあんな感じなんですか？　なんか、人を避けてるっていうか」

美雪「うーん、一回生のときクラス一緒だったけど、その頃から誰とも群れないイメージだったな。早坂さん美人だから男子がよく声かけに行ったりもしてたけど、全員撃沈。私もあんまり話したことないんだよねー」
亮「そうっすか」
美雪が亮を一瞥してフッと笑う。
美雪「惚れても無駄だぞー」
亮「違いますよ」
美雪「ほんとにー？」
苦笑いする亮とそれを面白がる美雪は、本棚の整理を続けた。

十　植物園

恵は少し成長した芽の花壇の前にしゃがんでその芽をじっとながめている。
恵「今年はお花つけてよー」
恵は芽をつつく仕草をしながら話しかける。
亮「それ、早坂さんが育ててる花ですか？」
恵「えっ」
恵がびっくりして振り返ると、すぐ後ろで亮が花壇をのぞき込んでいる。恵と目が合った亮はニッと笑った。
恵が急いで立ち上がり、その場を去ろうとすると、亮が道をふさぐ。何度か通せんぼの攻防を繰り返した後、恵は拗ねたような顔で言った。
恵「私に何か用ですか？」
亮「やっと話す気になってもらえた」
視線をそらす恵を見て苦笑いしながら、亮は続ける。
亮「俺、今三回だけど一浪してるんですよね。だからたぶん、早坂さんと同い年」
恵は亮の顔をチラリと見てから、また視線をそらす。
亮「小学校と中学校、一緒だったと思うんだけど、覚えてない、です……か？」
恵「……瀧川、亮君。覚えてるよ」
亮「やっぱり、よかったー。めっちゃ避けられるから忘れられてるのかと思った」
喜ぶ亮とは対照的に、恵はまだ不機嫌そうな顔をしている。
亮「でもあれだな。早坂、なんか雰囲気変わったな。前はもっとよく笑う感じだったけど、今はなんか、クールっていうか……」
嬉しそうに話す亮だったが、恵の反応が悪いことに気づき、だんだん言葉が弱まっていく。
亮「あ、あれかな。一応先輩だし、呼び捨てとか、タメ口と

かまずいかな……」
恵は亮の目をキッと見つめて言った。
恵「呼び捨てとかタメ口とかなんでもいいけど、私は昔とは違うの。あんまり関わらないで」
そう言い残すと、恵は亮の横を颯爽と通り過ぎて温室を去っていく。
取り残された亮は呆気にとられて立ち尽くしていた。

十一　居酒屋
亮と祐介が飲んでいる。
祐介がゼミの話を一生懸命話しているが、亮はあまり聞いていない。
亮「あのさぁ」
祐介「ちょっとお前、今俺が」
亮「めちゃくちゃ明るくていいやつだった小中の同級生と大学で再会して、そいつがすごい人と関わるのを避けてたら、お前どうする？」
祐介「え？」
祐介は一瞬怪訝な顔をするが、すぐに真剣に考え始める。
祐介「まあ、それはそいつにもいろんな事情があるんだろうけど……、そいつとまた仲良くなりたいって思うんならちょっと強引にでも話しかけたりするんじゃない？」
亮は祐介の言葉を聞いて嬉しそうに笑った。
亮「だよな。やっぱお前らしいよ」
祐介「はあ？　いきなりなんだよ」
亮「お前いいやつだよ。はい、乾杯」
亮がグラスを持ちあげると、祐介はよくわからないままつられて乾杯をし、そのまま亮と一緒にグラスの中身を飲み干した。

十二　研究室
恵を除く研究室の学生が集まり、資料の整理など各々の作業をしている。
菊池「今日、研究室のみんなでご飯でもどうかな？　三回生のみんなともっとちゃんと話してみたいし」
美雪「いいねぇそれ。みんな予定どう？」
三回生女子A「空いてます！」
三回生女子B「私も空いてます！」
三回生女子C「私も！　行ってみたいお店あるんですけど、紹介してもいいですか？」
美雪「え？　どこどこー？」

女性陣はすぐに店決めを始める。
菊池「瀧川君と伊達君は、どうかな？」
伊達「自分は、バイトなんで、大丈夫っす」
亮「あ、俺は暇なんで、お邪魔します」
菊池「よかった」
亮「あの」
菊池「ん？」
亮「早坂さん、来ますかね？」
菊池が苦笑する。
菊池「来てくれたらいいんだけど、難しいだろうね」
亮「そう、ですよね……。俺、ちょっと遅れるかもしれないんで、店決まったら位置情報送っといてもらっていいですか？」
菊池「いいよ」
亮は菊池に軽く頭を下げて、開いていたノートパソコンを閉じた。

十三　植物園

辺りはすっかり暗くなり、恵が花の観察を終えて手にノートを持ったまま温室を出ようとすると、扉を開けて入ってきた亮と鉢合わせた。
恵「今日は何の用？」
亮が視界に入った途端恵の表情が固くなる。
亮「この後研究室のみんなで飯行くんだけど、早坂もどう？」
恵「行くわけないでしょ」
亮「なんで？」
恵「なんでって、あんまり人と関わりたくないの」
亮「早坂ってそんなタイプじゃなかったじゃん。何かあったの？」
恵「別に、関係ないでしょ。ほっといて」
恵は亮を避けて温室を出ようとするが、亮はどかない。
恵「どいてよ、帰るから」
亮「わかった、こうしよう。早坂はこのまま帰って、俺は飯に行く。で、俺はそこで早坂がキャラ変わる前の中学時代の話をする」
恵「なっ、ちょっとそれは」
亮「話されたくなかったら一緒に来いよ」
恵は亮の目を恨めしそうに睨むが、亮は得意げに笑っている。
恵「――わかった行くわよ。その代わり、絶対子供の頃の話はしないでよ」
亮「わかったわかった」

恵「荷物取ってくるから待ってて」
　恵はそう言って、怒った顔をして温室を出ていった。

十四　ピザ屋さん

亮「遅れましたー」
　すでに食事を始めている研究室生のテーブルに亮が顔を出すと、振り返った美雪が驚いた顔をする。
美雪「早坂さん？」
　恵は決まり悪そうに亮の後ろからついてきて、首だけで軽く会釈をした。
亮「説得して連れてきました」
　得意げに亮が言うと、最初は呆気にとられていた一行も、笑顔で二人を受け入れた。
美雪「じゃあここ、座って」
　美雪は席を詰めて亮と恵に促す。
亮「ありがとうございます」
　亮はニコニコしてそのスペースに座り、恵もその横にちょこんと座った。
菊池「これ、ドリンク」
　亮と恵の向かいに座っている菊池が亮にメニューを渡す。
亮「ありがとうございます」
　受け取って少し眺めた後、亮は恵にメニューを見せた。
亮「酒、飲める？」
恵「私はいい」
亮「じゃあ、ソフトドリンクはここだから」
恵「わかった」
　二人のやり取りを見て、美雪と菊池が不思議そうにしている。それに気づいた亮は、笑って言った。
亮「俺、一浪してて、実は早坂さんとは小中の同級生なんですよ」
美雪「あ、なるほど」
恵「ちょっと」
　美雪と菊池は納得した顔をしているが、恵は不満げに亮を小突いた。
亮「これ以上は言わないよ。あ、すみませーん」
　亮はそう小さく言った後、元気よく店員を呼んだ。

＊　＊

　亮を含めてみんなが盛り上がっているが、恵はテーブルの隅で黙々とピザを食べている。
美雪「じゃあ瀧川君、雪国の出身なんだねー。スキーとか上

手だったりするの？」
亮「もちろん、スキーもスノボもやり込んでますよ」
美雪「すごいね！　私スキー場にすら行ったことないからなー」
菊池「秋田さんは名前に似合わず九州出身だからね」
亮「えっ、そうなんですか？」
美雪「私は両親の雪への憧れから名前付けられたらしいから。でもいいなー。冬になったらみんなのこと教えてよ」
亮「いいっすよ。俺、小学校の頃スパルタ教師に鍛えられたんで、教え方も心得てます」
菊池「学校でスキーの授業とかやるんだ」
亮「めっちゃやりますよ。しかもその先生、丸々してるうえにいっつも青い服着てて、スキーうまいけどドラえもんが滑ってるようにしか見えないんですよ」
美雪「何それ、見てみたい」
一同が笑いに包まれる。
恵「ふふっ」
恵が小さく笑うと、みんなの視線が一気に恵に集まった。
恵はそれに気づいて慌てて笑みを消す。
菊池「早坂さん、今笑った」
美雪「ね、笑ってるほうが絶対いいよ」
恵「いや、今のは別に」
恵はドギマギして手元のオレンジジュースをストローで飲む。
亮「今、タナセンのこと思い出して笑ったろ」
恵「あれはちょっと、可笑しさが別格だから……」
菊池「そっか、早坂さんも同じ小学校だから知ってるんだね」
美雪「早坂さんからも聞かせてよ。その先生の話」
恵「そんなに面白い話も、特に……。その先生がネズミが出て大慌てした話、とか？」
亮「ああ、あれは、傑作」
美雪「それ絶対面白いじゃん」
亮に後押しされながら、恵は徐々に口数が増え、楽しい会話が続いていった。

十五　帰り道

菊池「じゃあ今日はみんなありがとう。またご飯行きましょう」
一同「ありがとうございましたー」
菊池の挨拶を皮切りに、みなそれぞれの家へ帰っていく。
恵と亮は駅へ向けて歩き出した。
恵「瀧川君、下宿でしょ？　こっちじゃないんじゃ……」

亮「今日は無理矢理誘ったし、駅まで送るよ」
恵「いいよ別に」
亮「じゃあ俺も、駅まで用があるってことにしといて」
恵は亮に返事をせずに歩調を速めた。亮がその後を追い、しばらく二人は無言で歩いた。
亮「今日、楽しかった？」
恵「……普通」
亮「久しぶりみたいだったけど、やっぱり笑ってるほうが似合うよ」
恵「……」
恵は複雑な表情をしている。
亮は立ち止まって言った。
亮「早坂が言ったんだよ。俺に笑えって」
恵も足を止める。
亮「中学のとき、夏直前にケガして最後の大会出られなくなって、体育館裏で落ち込んでた俺のことわざわざ見つけて、笑えって言ったんだよ」

（回想）
制服姿の亮（中学生）が体育館裏で座り込んでいる。飛んできたボールが肩に当たって顔をあげると、バレー部の格好をした恵（中学生）が立っている。
恵「なーにくよくよしてんだよ」
亮「お前みたいな健康優良児には俺の気持ちなんてわかんねーよ」
亮は不機嫌そうに顔をそらすが、恵はニコニコして亮に近づき、隣に腰を下ろす。
恵「どんなに辛いことがあっても、落ち込むより笑ってるほうが人生絶対楽しいよ」
亮「早坂はいいよな、お気楽そうで」
恵「バカにしてるでしょ。これでも結構苦労してるんだよ」
亮「どんなだよ」
恵「……例えば、夜眠れないとか、朝起きれないとか」
亮「なんだよそれ」
軽く笑った亮の顔を、恵が嬉しそうにのぞき込む。
恵「ほら、やっぱりそのほうがいいよ。とりあえず笑いなよ。楽しいから」
亮「やっぱ能天気」

恵と亮が二人で笑っている。

恵「高校でも、バレー続けたの？」
亮「おかげさまで」
恵「そっか」
　恵は少しだけ笑って、また歩き出した。
亮「けっこう頑張ったんだぞ。県大会ベスト4まで行ったり。でもまた準決勝の前日に事故ってケガして、出れずに敗北」
　亮が恵に追いついて、二人は並んで歩き出した。
恵「また落ち込んだ？」
亮「いや、そのときは笑ったよ。自分の人生不運だなーって」
恵「確かに」
亮「でもまあ、俺が出てれば決勝行けたかもしれないからなー」
恵「何それ」
　恵が少し笑うようになったところで、駅の前に着いた。
恵「じゃあ」
亮「また、誘うから。断られても、結構頑張るから」
恵「まあ、暇だったら、ね」
　恵はすました顔で亮に背を向けて、駅の階段を降りていく。
　その最中、亮から見えなくなった恵の顔にはかすかに笑みが浮かんでいた。

十六　植物園

　恵がいつものように花の手入れをしようと温室に入ると、亮が花壇をしげしげと見つめている。
亮「お、来た来た」
恵「……今日は何の用？」
亮「特にない」
恵「じゃあ帰って」
亮「うそうそ。花のこと教えてもらおうと思って」
恵「花のこと？」
　恵は少し訝し気に首を傾げる。
亮「そう。俺正直、この研究室にいるけど花の育て方とかよくわかってないから。そういうの一番詳しいだろ？」
恵「まあ、いいけど。でも、なんでこの研究室選んだの？」
亮「それはまあ、何となく……」
　亮は話を誤魔化しながら、一房にたくさんの淡いピンクの花がついた植物を覗き込んだ。
　その様子をしばらく眺めてから、恵は亮に近づいて口を開いた。

恵「その花はゼラニウム。水はけのいい土が好きだから、あんまり水はあげすぎないように注意するの」
亮「ふーん」
恵「日当たりのいい場所が好きだから、植える場所にも注意してるんだよ」
亮「なるほど」
恵「こっちはシクラメン。逆にシクラメンにはたっぷり水をあげる必要があってね、こうやって土を手で触って乾いてないか確かめてあげるの」
次々に説明する恵の話を、亮も興味深げに聞いている。
話が進むごとに、恵の話し方は生き生きとしていき、話が終わるころには日が落ちかけていた。

十七　講義室

亮と祐介が、講義室の後ろのほうの席で植物の遺伝子の講義を受けている。
祐介は横でうとうとしているが、亮は教授の話を片肘を突きながら聞いている。
斜め前のほうの席に伊達を発見し、亮が横目で眺めていると、伊達はしきりにノートに何か書き込んでいる。
亮はしばらく伊達を観察した後、また視線を正面のホワイトボードに戻した。

十八　廊下

亮と祐介が並んで講義室から出てくる。祐介はあくびをしている。
祐介「亮はいつの間に授業で寝なくなったんだよ。ふぁーあ」
亮「俺は前から真面目だよ」
祐介「嘘つけ。俺にレジュメ取らせまくってたやつが」
祐介はあくびを噛み殺しながら亮に軽くパンチした。
亮はそれを軽く受け流す。
祐介「今晩暇？　ラーメン食べに行かね？」
亮「あー、今日は寄るとこある」
祐介「お前最近付き合い悪いなー」
亮「えつ、まじか。ごめん」
祐介「謝んなよ。いいよ別に」
祐介は少し前に出て両手を頭の後ろで組んだ。
祐介「俺は一人でラーメン食ってくるよー」
亮「拗ねんなよ」
亮は苦笑いしてその後をついていった。

十九　植物園

亮が温室に入ると、花をつけていない植物をかがんで眺める恵の姿があった。

亮「早坂」

恵「何？」

恵は亮を一瞬振り返り、また視線を植物に戻す。

亮「ちょっと勉強教えてよ、先輩」

恵「都合のいい時だけ後輩にならないでよ」

恵はそう言いつつも、立ち上がって亮のほうに歩いてくる。

恵「で、何？」

亮「高安先生の、遺伝子学」

恵「ああ、あれね」

二人はそのまま温室を出て、植物園のベンチにすわった。辺りは暗くなってきているが、植物園はきれいにライトアップされている。

亮「この図、写したんだけど意味がわからないんだよね」

恵「あー、ここ私も初めてやったときわかんなかったんだけど、二回前ぐらいに書いてた図と重ねるとわかりやすくて」

恵はまた流暢に解説していく。亮は真面目に聞きながら相槌を打つ。

恵の解説が終わるころ、亮がふと呟いた。

亮「そういえば早坂って院行くの？」

恵「ううん」

亮「じゃあ就職？」

恵「いや、しないよ」

事もなげにいった恵に亮が驚く。

亮「え、じゃあ卒業しないの？」

恵は無言で頷く。

亮「……なんで？」

恵「未来が見えないから」

亮「え？」

恵「院まで行ってやりたいこととか、就職してやりたいことかとか、それがホントにできるのかとか、わかんないんだよね。だから一旦留年」

言い終えると恵は立ち上がって伸びをした。

亮「なんか、早坂、前よりマイペースになったな」

恵は振り返って、口元で静かに笑った。

二十　研究室

亮が研究室で本棚から本を取り出して読んでいると、美雪がやってきた。

美雪「瀧川君、最近熱心だね」
亮「研究室入ったからには、ちゃんと勉強しようと思って」
美雪「勉強もねー」
亮「え？」
美雪「最近よく会いに行ってるでしょ」
　美雪がニヤリと笑う。
亮「いや、別に、秋田さんが思ってるようなんじゃないですよ」
　亮が苦笑すると、美雪はクスッと笑った。
美雪「まあでも、最近前より話してくれるようになったし、
　瀧川君のおかげかな。やっぱり熱心だとは思うけど」
亮「……でももっと笑ってほしいんですよね。あいつ、
　ホントによく笑うやつだったから」
　美雪は亮を見てまた笑った。
　そこへ菊池がやってくる。
菊池「あ、ちょうどよかった。今度オープンする植物園、花
　岡先生が協力してるからってことでプレオープンの招
　待券もらったんだ。二人もどう？」
美雪「いいねぇ。何枚あるの？」
菊池「四枚」
美雪「ちょうどいいじゃん」
　美雪は菊池の手元にある四枚のチケットの内二枚を取り上げて、振り返って亮に差し出した。
美雪「瀧川君、早坂さんのこと誘ってきてね」
亮「はい……」
　亮は差し出された二枚のチケットをゆっくりと受け取った。

二十一　植物園

　亮が温室に入ると、恵はいつもの花のついていない植物の前にしゃがみ込んでいた。
亮「はーやさか」
恵「……」
　亮が声をかけても返事はない。
亮「早坂」
　亮が近づいてもう一度話しかけると、恵はゆっくりと亮を振り返り、また視線を植物に戻した。
亮「どうした？」
　亮が恵の顔を覗き込むと、恵は植物をじっと見つめたまま重い口を開いた。
恵「……失敗」
亮「失敗？」
恵「新種の花の開発」

亮「ああ、これ……」
　恵が見つめる植物には、確かに花はついていない。
亮「でも、まだ来年が――」
恵「今年じゃないとダメだったの」
亮「……」
　恵の切実な様子に、亮も言葉に詰まる。
　静かな温室の中に、遠くの鳥のさえずりが聞こえてくる。
亮「気分転換しよう」
　沈黙を破った亮を恵が振り返った。
亮「これ、菊池さんがくれた、新しい植物園のプレオープンのチケット」
恵「え……」
亮「四枚あるらしいから、気分転換に行こう」
恵「……でも、あんまり遠くに行くのは……」
亮「小学生みたいなこと言うなよ。けっこう近くだし、フラッと行けるよ」
　恵の心配を亮は明るく笑い飛ばした。
　渋る恵の前に亮がチケットを差し出す。
恵「まあ、ちょっとだけなら……」
　華奢な手でチケットを受け取った恵を見て、亮は満足そうに微笑んだ。

二十二　プレオープンの植物園
　新しい植物園は植物や花々の配置が工夫されていて、一面グラデーションになっているバラの小道があったり、室温調節で実現された南国の植物のブースや北欧の植物のブースがあったりする。その中を菊池と美雪、亮、恵が散策しており、特に恵が興味深げにたくさんの植物を眺めている。
美雪「早坂さん、こっち見て」
恵「あ、すごい……」
　美雪と恵が少し先を歩いていると、菊池が亮に声をかけた。
菊池「早坂さんも秋田さんも楽しそうだね」
亮「そうですね」
菊池「まさか最後の年に、こうやってみんなで仲良くなれると思ってなかったよ。瀧川君のおかげだね」
亮「いや、俺は別に……」
菊池「これからも、こうやって遊べたらいいね」
亮「俺も、そう思います」
　菊池と亮は、前を歩く美雪と恵を眺める。
「ゴーン、ゴーン」
　楽し気な四人を祝福するように、正午を告げる植物園の鐘が鳴った。

二十三　仲良くなる研究室生たち

研究室の本棚をみんなで整理したり、大学の植物園の土の植え替えをしたり、食事に行ったり……。

恵を含めた研究室生たちが一緒に行動することが増え、恵もよく笑うようになっていった。

夏

二十四　研究室

日が暮れて暗くなった研究室の中で、亮が時計を気にしながらリュックに荷物をまとめている。

そこへ花岡がやってきて亮に声をかけた。

花岡「瀧川君」

亮「あ、はい」

花岡「ちょっとそこの本を取ってもらえませんか？」

振り返った亮に、花岡は本棚の一番高いところを指さして示した。

チラリと時計を見て、亮が頷く。

亮「はい」

花岡「すみませんねぇ」

亮「いえ。どの本ですか？」

花岡「その本棚の上に横倒しになっている、青い背表紙の大きな本です」

亮「わかりました」

亮は踏み台を持ってきて登り、本棚の上に手をかけた。本棚と天井の隙間から取り出した青い本は五十センチ四方の大きな図鑑で、かなり古いものなのか埃をかぶっている。

亮は慎重に台を降りて、花岡の前の机に本を置いた。

亮「どうぞ」

花岡「ありがとうございます」

亮「また戻すとき言ってください」

花岡「急いでるところすみませんでした。ありがとう」

亮「いえ、大丈夫です」

亮はぺこりと頭を下げると、リュックを持って部屋の外へ駆けていった。

そんな亮の姿を、花岡は微笑ましく見送った。

二十五　植物園

亮が植物園の入り口に走っていくと、ちょうど植物園を出ようとしていた恵と鉢合わせた。

亮「よかった。ちょっと来て」

恵「え？」
　キョトンとする恵の手首をつかんで、亮は走り出した。そのまま学舎のほうへと走っていく。
恵「ちょっと待って。どうしたの？」
亮「花を見に行く」
恵「花？　もう夜だよ」
亮「大丈夫。一番きれいな花が見られるから」
　亮は学舎の非常階段のさびれた柵を開けて、恵を連れて駆けあがっていく。
　恵が息を荒くしながら登っていくと、二人は学舎の屋上に出た。
恵「ハァ、ハァ、ハァ」
亮「ごめん、ちょっと急ぎすぎた」
恵「いい、けど……、ここに、何が、あるの？」
　恵はひざに手をついて上がった呼吸を整えようと深呼吸する。
「パーン」
　いきなり辺りが明るくなり、恵は音につられて顔をあげた。
恵「あ……」
　恵が見つめる先には、夜空に大きく咲いた花火があった。
亮「花火、一番いいところで見たくて」
恵「きれい……」
　特大の花火が次々に打ち上げられる。その光景を、二人はしばらく無言で眺めていた。
　亮が何かを言おうと恵を振り向くと、恵の頬に涙が伝っているのが見えた。亮がその姿をしばらく見つめていると、それに気づいた恵は、自分の涙に初めて気がついたように目元を薬指で拭った。
恵「あれ、ごめん……。おかしいな」
　恵は涙を拭いながら、困ったように笑う。
恵「えっ――」
　亮は黙って恵を抱きしめた。亮の腕の中で、恵が一瞬戸惑った顔をしてから、それを受け入れるように亮の背中に腕を回す。
　二人の頭上では、花火が咲き乱れている。
　二人は少し体を離して、亮が恵の濡れた頬を拭った。しばらく見つめ合った後、二人の顔がゆっくりと近づいていく。
「お前たち何してるんだ」
　唇が触れ合う直前、遠くから男の声が聞こえてきて、二人は動きを止めた。辺りを見渡すと、隣の学舎の屋上で、同じように忍び込んだ学生が警備員に怒られている。
亮「降りるか」

恵がコクリと頷くと、亮は恵の手をとって歩き出し、二人は階段を降りた。

二十六　植物園

恵がいつものように温室で花に水をあげている。その顔には今までで一番幸せそうな笑顔が浮かんでいる。

恵は花をつけなかった植物の前にしゃがむと、話しかけるように言った。

恵「私、もうちょっと頑張ってみるね」

恵はゆっくりと立ち上がり、温室の中の花を見渡す。花の甘い香りを独り占めするように大きく空気を吸い込んで、そしてゆっくりと吐いた。

恵が周囲の花の美しさに満足して、踵を返そうとした、その時。

恵「うっ……」

恵は突然心臓の辺りを抑えて苦しみ始めた。

「ガシャン」

恵の手から滑り落ちたガラスのジョーロが割れて、辺りに破片が散乱する。そこに恵が倒れこみ、破片で切れた傷口から血が流れ出す。恵の頬と掌、そしてふくらはぎから流れ出る赤い血は、淡い色の花が詰まった植物園の中で禍々しく目立っている。

亮「早坂っ！」

そこに突然亮の声が響いた。倒れている恵を見つけて駆け寄ってくる。

亮「早坂、大丈夫か？」

亮は苦しむ恵を抱き上げてしきりに声をかける。しかし恵は苦しむばかりだ。亮が戸惑うように飛び散ったガラスの破片を見回すと、後ろから声がした。

花岡「瀧川君、落ち着いて。今救急車を呼びましたよ」

亮「花岡先生……」

亮が振り返ると、花岡がいつもより少し険しい表情で亮の肩に手を置いている。

花岡「ここは危険ですから、外のベンチに寝かせてあげましょう」

亮「は、はい」

亮は丁寧に恵を抱え上げ、花岡のあとについていった。

二十七　病院

亮と花岡が処置室の前の椅子に押し黙って座っている。亮の服や手には、まだ恵の血が付いたままだ。

処置室の扉が開いて医者が出てきたとき、亮は医者に声を

かけようと立ち上がった。
亮「あの……」
恵の母「恵は、恵は大丈夫ですか？」
　亮が口を開いたと同時に恵の母が駆け込んできて、医者にすがりついた。
医者「お母さん、落ち着いて。久しぶりの発作でしたが、今は落ち着いています」
恵の母「あの子は、まだ生きられますか？」
医者「……今は、大丈夫です。少しお話しましょう」
　亮が恵の母と医者の会話を聞いてぎょっとする。
　泣き出さんばかりにすがりつく恵の母に、医者は移動するように促す。亮と花岡は二人を無言で見送った。
　二人が去った先を呆然と見つめる亮に、花岡が声をかける。
花岡「瀧川君も、少し話しましょう」
　亮が怯えたような目で花岡を振り向くと、花岡はまっすぐな目で亮を見つめていた。

二十八　病院

　人気のない病院の待合室で、亮が両ひざに肘をつき、下を向いて座っている。
花岡「どうぞ」
　花岡が亮の前にペットボトルの水を差しだすと、亮は花岡をチラリとみて受け取った。
亮「ありがとうございます……」
　亮は消え入りそうな声で言った。
　花岡が亮から少し離れた椅子に座る。
花岡「早坂君はね、心臓の病気なんです」
　亮はうなだれたまま、何も言わずに聞いている。
花岡「心臓の筋肉がだんだん動かなくなっていく病気だと聞いています」
亮「……いつからですか」
花岡「中学三年の夏に見つかったそうです」
　亮の肩がピクリと動いた。
花岡「成人できるかわからないと言われていたそうですが、早坂君はこうして今も生きています。本当に、よく頑張っています」
亮「……先生は、いつから知ってたんですか？」
花岡「一昨年の秋です。研究室訪問に来た早坂君は、私にまっすぐな目で聞きました。ここなら自分だけの花を作れますか、と」
　亮が少し顔をあげる。その手からペットボトルが静かに落ちた。

亮「自分だけの、花」
花岡「そうです。早坂君は新しい花を作って、自分の名前を付けて後世に残したいと言っていました。それが自分が生きた証になるからと。切実な様子で」
亮「……早坂は、あとどれくらい生きられるんですか？」
花岡「わかりません。ただ、少し前の彼女には、焦りがあったようでした」
亮は両手で顔を覆った。
亮「……俺は、何も知らずに、早坂を振り回してました」
花岡「自分を責めてはいけませんよ。最近の早坂君は、私が見てきた中で一番生き生きしていました。それは君のおかげですよ、瀧川君」
亮「でも、俺が……」
亮は言葉に詰まった。顔を覆った指の隙間から、わずかに濡れた頬が見える。
花岡「早坂君が目を覚ましたら、顔を見せてあげてください」
花岡の穏やかな言葉に、亮は返事をすることができなかった。

二十九　病院

翌朝、亮は恵が運ばれた病院を訪れた。

恵の病室の扉をノックしようとした亮は、中から恵と母の声が聞こえてきて、その手を止める。そしてそのまま、扉が見える少し離れたソファに座った。
座っている亮の前を、入院患者のおじいさんや見舞い客のおばあさん、松葉杖の若い男など、さまざまな人が通り過ぎていく。彼らをなんとなく眺めていると、亮の前まで一人の男の子が走ってきて転んだ。
男の子「うっ、うっ」
亮は立ち上がって、転んだまま泣き出しそうな男の子を持ち上げて起き上がらせた。
亮「ほら、泣くな」
亮がしゃがんで男の子に目線を合わせてニッと笑うと、男の子は涙をこらえた顔でコクンと頷いた。その男の子の頭に亮が手をぽんと乗せる。
男の子の母「すみませーん」
そこへ男の子の母がやってきて、男の子の手をとった。
亮「いえ」
亮が軽く会釈すると、男の子の母は深くお辞儀をしてから男の子を連れて歩いていった。その途中、振り返って小さく手を振った男の子に、亮も笑って手を振り返した。
恵の母「瀧川亮君？」

突然の声に亮が驚いて振り返ると、恵の母が立っていた。
亮「あ、はい」
恵の母「大きくなったわねー。小学生以来だものねぇ」
亮「はい……」
恵の母「昨日は恵のこと、助けてくれたんだってね。ありがとう」
亮「いや、俺は……」
亮は気まずそうに目をそらした。それを見て、恵の母が少し寂しそうに微笑む。
恵の母「恵と、仲良くしてやってね」
亮が驚いて顔をあげると、恵の母が優しく笑った。
恵の母「最近恵、楽しそうなのよ。前はずっとふさいでたから、感謝してるわ」
亮「いえ、こちらこそ……」
恵の母「私、仕事に行かないといけないから、顔見せてあげて」
亮「はい」
歩き出した恵の母に、亮は頭を下げる。顔を上げて、去っていく恵の母の後ろ姿を眺める。そして、亮は踵を返して恵の病室の前まで歩いた。
「コンコン」
亮「瀧川、です」
扉をノックして亮が言った。
恵「……どうぞ」
しばらくの沈黙のあと、恵の小さな返事が聞こえた。
「ガラガラガラ」
亮が扉を開けて中に入る。
病室のベッドには、頬と掌の傷口にガーゼを当てた恵が座っている。恵は、入り口付近で立ち止まった亮をチラリとみてから、ツンとすました顔で口を開いた。
恵「そこの椅子、座れば」
亮「あ、ありがとう」
ベッドの横の丸椅子に、亮が遠慮がちに座る。恵は、亮のほうは見ずに、窓の外を眺めている。
恵「昨日はありがと。助けてくれて」
亮「いや、俺はその……、何も知らずに振り回してごめん」
恵「聞いたの？」
亮は無言で頷いた。恵は依然窓の外を眺めているが、気配でそれを察する。
恵「私はね、もう七年くらいこの病気と付き合ってるの。こんな短期間じゃ大して変わらないわ」
亮「……」
また沈黙が流れる。

恵は少しうつむいて、言った。
恵「でも、もう関わらないでおきましょう」
亮「え……」
亮はハッとして顔をあげた。
恵「研究室のみんなにも、そう言っておいて」
亮「早坂は……」
亮の声が、口を突いて出たように大きく響いた。
恵がそれに驚いて亮を伏し目がちに見る。
亮「早坂は、どうしてそんなに独りになりたがるんだよ」
亮は恵の目をまっすぐに見て尋ねた。恵は気まずそうに目をそらして、うつむく。
恵「関係ないでしょ」
亮「早坂に関係なくても、俺にはある」
恵「……何、それ」
亮「俺、もっと早坂のことちゃんと知りたいんだ」
恵「……」
恵は、苦しそうに歪んだ顔が亮から見えないようにそむけた。
恵「……私のことなんて知っても意味ないよ」
亮「なんだよ……」
恵「私と仲良くなっても、悲しい思いしかしないんだよ」
亮「そんなの、早坂が気にすることじゃねーだろ」
恵「本当に悲しい経験したことないから言えるんだよ！」
恵の叫ぶような声が病室に響いた。
恵「中三で病気が見つかって、引っ越しまでして入院して、不安と絶望しかなかった私にすごく優しくしてくれた人がいたの。同じ病気の、少し年上のお姉さん。その人はいつも元気で、いつも笑ってた。明日はこのドラマを見ようとか、こんな音楽を聴こうとか、いろんな約束して、笑顔で病室に帰っていく、そんな毎日。でも……、でもね、そんな人が突然死ぬんだよ、この病気は……」
うつむいた恵の肩が小刻みに震える。
恵「笑った顔も声も、全部はっきり覚えてるのに、突然それがこの世から消えちゃうんだよ……」
黙って話を聞いていた亮は、じっと恵を見つめて、口を開いた。
亮「早坂は、変わってないんだな」
恵「え……」
亮「昔から、人の幸せばっか考えてる」
亮は微笑んでから、少し困ったような顔をする。
亮「でもちょっと、優しすぎるよ」
恵「……」

亮「もっと自分の幸せ大事にしろよ。独りになるのは、寂しすぎる」
恵「……独りなんて、慣れてるよ」
亮「そんなの慣れなくていい。早坂はもっと、周りにいっぱいわがまま言っていいんだ」
恵はゆっくりと、うかがうように亮と目を合わせた。恵の目を覗き込むように、亮は少し恵に顔を近づける。
亮「俺はもう、早坂に距離とられるほうが辛いから。使いっぱしりでもなんでもいいから、早坂自身のためにできること、教えてほしい」
恵「……」
しばらくして、恵が視線をそっとそらした。
恵「次の春に、咲くかもしれない花があるの……。もうすぐ種をまかなきゃいけないから、私が退院するまでの間、私の代わりに育ててほしい。私のお願いはそれだけ」
亮「……早坂らしいな」
亮は驚いて少し黙ってから、クシャっと笑った。

三十　植物園

亮が温室で、何も植えられていない花壇とにらめっこしている。
伊達「何してんだ？」
亮「うわぁ」
伊達が亮の後ろから突然声をかけると、亮は驚いてすっとんきょうな声をあげた。
亮「あ、あぁ、伊達君」
伊達はしげしげと亮が見つめていた花壇を観察する。
伊達「何か植えるのか？」
伊達は土を指さして言った。
亮「え、あ、うん。早坂に頼まれた種を植えたいんだけど、どこに植えようかなと思って」
亮は頭を掻きながら苦笑して言った。
伊達「どんな花」
亮「忘れな草の変種らしいんだけど、日当たりが良くて水持ちのいいところに植えてくれって言われてて」
伊達「こっち」
伊達は亮の様子を気にも留めずに歩き出した。亮は慌ててその後姿についていく。
伊達「それならたぶん、ここがいい」
伊藤は立ち止まると、温室の奥の一角を指さした。
亮「あ、ありがとう」
伊達「肥料はあの倉庫。鍵の番号は０８１７。花岡教授の誕

生日」
亮「詳しいんだな」
伊達「花岡先生に教えてもらった。俺、花いじるの好きだから」
亮は驚いた顔をしてから、ほぼ無意識に伊達に手を差し出した。
亮「これからよろしく」
伊達は無表情に差し出された手を見てから、武骨な手で亮の手を握り返した。

秋

三十一　病室
恵は病室で静かに窓の外を眺めている。その視線の先にある木々は、ほんのり葉を黄色く色づけている。
「ピコン」
恵の携帯が小さく鳴った。通知を開くと、亮から動画が届いている。恵は嬉しそうにその動画を再生した。
亮『今日、発芽しましたー！』
動画の中で、亮が自撮りでピースをした後小さな淡い緑色の芽が映される。芽の様子がよくわかるように、芽のアップや土の様子までじっくりと撮影されている。
亮『今の植物園はこんな感じでーす』
亮は歩き回りながら植物園の様子を動画に収めていく。動画の中に、チラリと水やり中の伊達の姿が映る。
亮『もうちょっとしたらいろんな秋の花が咲くと思うから、続報お楽しみに！』
亮の元気な声と共に動画が終わった。暗くなった画面に、楽しそうに画面を覗き込む恵の顔が映る。それを見て、恵は少しだけ表情を曇らせた。そのまま背もたれにトンともたれかかる。
「ガラガラガラ」
恵の母が水の入れ替えを終えた花瓶を持って病室に入ってくる。
恵の母「どうしたのー？　楽しいのかそうじゃないのか微妙な顔しちゃって」
恵「お母さん……」
恵の母は、花瓶を置いてからベッドの隣の椅子に座った。
恵はもう一度窓の外を見る。
恵「お母さん、私、このままじゃ一番幸せになってほしい人を傷つけちゃう」
恵の母は微笑んで、布団の上の恵の手を握る。

恵の母「大丈夫よ。恵のことが好きな人にとっては、恵との
幸せな時間が何よりも大切なの。お母さんも同じよ」
恵「……そうだと、いいな」
ポツリと呟いた恵を見て、恵の母が手をぎゅっと握り直した。

冬

三十二　食堂
亮と祐介が向かい合ってカツ丼を食べている。
亮「ちょっとお前に頼みがあるんだけど」
祐介「何？」
亮「お前、彼女できたんだよな？」
亮の言葉を聞いて祐介がにんまりと笑う。
祐介「ああそうだよ。聞きたいか？　俺がどうやってクリス
マスを前に彼女をゲットし――」
亮「それはいいんだけど、女子の知恵を借りたいんだよ」
祐介「あー、って話聞けよ！」
元気よくツッコむ祐介をスルーして亮は携帯を触る。
亮「今要件送ったから、これ彼女に聞いといて」
祐介「任せな。俺の彼女、女子力高いから」
祐介は得意げに笑っている。
祐介「そういえば、瀧川もやっぱ付き合ってんのか？」
亮の手が止まった。
亮「……さあな」
祐介「さあなってなんだよ。俺協力してやんだぞ」
亮「お前には言わねー」
ギャーギャー文句を言う祐介を無視して、亮はバクバクと
カツ丼を口に運んだ。

三十三　病室
病室の窓から見える木はすっかり葉を落とし、外は雪が
降っている。
恵がベッドの上で亮から送られてきた動画を眺めている。
動画の中では、成長して葉をつけた植物の前で亮が得意げに
話している。
「コンコン」
恵「はい」
恵が動画に気を取られたままノックに返事をすると、ガラ
ガラと扉が開いた。
亮「早坂」

恵「ひゃっ」
　恵は声をかけられて初めて入ってきたのが亮だと気づき、すぐに動画を止めて携帯を置いた。
恵「ど、どうしたの？」
　恵は平静を装ってスッと背筋を伸ばした。亮はニヤニヤしながら恵に近寄ってくる。
亮「はい、これ」
恵「え？」
　亮は恵の前に白い箱を差し出した。恵が驚いて亮を見あげると、亮は恵に箱を開けるように促す。
　恵が丁寧に箱を開けると、中から香水の小瓶が出てきた。
恵「これ……」
亮「嗅いでみて」
　恵は自分の手首に香水を一吹きして、その香りを確かめた。
恵「あっ」
　恵が思わず亮を見あげると、亮は得意げに笑ってベッドの横の椅子に腰かけた。
亮「花の匂いが恋しいかなと思って」
恵「これ、キンモクセイの香りの香水だよね。珍しい」
亮「だいぶ時期過ぎちゃったけど、植物園の中みたいだろ？」
恵「うん。ありがとう、ホントに」
　恵は感心したようにしげしげと香水を眺めた。そんな恵の様子を、亮は隣で優しく見守っている。
恵「あ、そうだ」
　勢いよく恵が振り向くと、突然目が合ったことに亮が少し驚いた顔をした。
恵「私からも、嬉しい報告があります」
亮「何？」
恵「来週の検査結果がよければ、また退院できることになりました！」
亮「え、まじか？」
　身を乗り出して聞く亮に、恵が笑顔で頷く。
亮「よかった。よく頑張ったな」
　亮の優しい声に、恵は一瞬固まって、頬を赤くした。
恵「べ、別に、頑張ってくれたのはお医者さんだから……」
亮「退院したら、何したい？」
恵「……この前行った、ちょっと遠くの植物園に行きたい」
　遠慮がちに呟いた恵の言葉に、亮は大きく頷いた。
亮「よし、行こう。ちょうどクリスマスだし。来週までもうちょっと頑張れ」
恵「うん」

小さく返事をしてから、恵は火照った自分の頬にそっと手を当てた。

三十四　研究室

亮が研究室に入ると、美雪が本棚を整理している。

美雪「あ、瀧川君」

亮「どうも」

振り返って言った美雪に、亮はイヤホンを片耳外して会釈した。

美雪「最近早坂さん、どう？」

亮「来週の検査結果がよければ退院できるそうです」

美雪「そうなんだ！　それはよかった。そうだこれ、早坂さんに届けてくれない？」

美雪は机の上の白い封筒を手にとって、亮に差し出した。

亮はその封筒を見つめて、思い切ったように口を開いた。

亮「……秋田さんも、よかったら見舞い行きませんか？」

美雪「え？」

美雪は驚いたように亮を見た。その視線の先で、亮は真面目な顔をして立っている。

亮「早坂は、自分と仲良くなっても悲しい思いしかしないからって、それだけの理由で、ずっと周りの人間を遠ざけてきたんです。でも、今は退院できるくらいよくなってるみたいだし、早坂も本当は秋田さんみたいな女友達が欲しいだろうなと思って」

美雪「……そうねぇ。私も、早坂さんとちゃんとお友達になりたいわ」

亮「前もって連絡すると、早坂は遠慮して断りそうなんで、こっそり行って驚かせてやりましょう」

美雪「そうね」

亮と美雪は、顔を見合わせていたずらっぽく笑った。

三十五　病室

恵がベッドの上で黒いスヌードを編んでいる。

「コンコン」

恵「あっ、ちょっと待って」

扉をノックする音にビクッと肩を震わせた後、恵は布団の下に編んでいたものを隠した。

恵「どうぞー」

「ガラガラガラ」

恵が扉の外に声をかけると、亮が扉を開けて入ってくる。その後ろに人が続くのを見て、恵は驚いた顔をした。

美雪「早坂さん、久しぶり」

亮の隣に、美雪が少し小さくなって立っている。
恵「……久しぶり」
呆気にとられる恵に、亮は歩み寄って言った。
亮「ずっと早坂のこと気にしてたから、来てもらった」
恵「あ、ありがとう。あの、よかったら座って」
恵は部屋の入口にたたずむ美雪をぎこちなくベッドのそばの椅子に促す。
美雪「ありがとう」
美雪はおずおずとやってきてベッドの傍の椅子に腰かける。亮もその隣の椅子に座った。
恵「ごめんね、お菓子とかの用意なくて……」
美雪「全然気にしないで。こちらこそごめんね、突然来ちゃって」
恵「そんなことないよ。ありがとう」
美雪がカバンの中から封筒を取り出す。
美雪「これね、早坂さんが離れてた間に咲いてた植物園の花を押し花にしてあるんだけど、よかったらもらってやって」
恵「すごい……」
美雪は十枚以上の押し花の栞を恵に差し出した。受け取った恵は興味津々に一枚一枚眺めていく。
恵「ありがとう。こんなにいいもの作ってくれてたんだね」
恵は顔をパッと明るくして、嬉しそうに笑った。
美雪「喜んでくれて嬉しい」
恵の嬉しそうな顔を見た美雪は、同じくらい嬉しそうだった。

＊　＊

病室の中で恵と美雪と亮が談笑している。
窓から見える空には茜色が差している。
亮「俺、そろそろバイトだから帰るわ」
亮は美雪を振り向いて尋ねる。
亮「秋田さんどうしますか？」
美雪「私は、もうちょっといようかな。いい、かな？」
美雪が恵のほうをうかがうと、恵は笑顔でコクコクうなずいた。
亮「わかりました。じゃあお先です。早坂、明日の検査、頑張れよ」
恵「うん、ありがとう」
亮は恵の肩を軽くたたいてから病室を出ていった。それを見送ってから、恵が軽く座り直すと、布団の端から編みかけ

のスヌードが少しだけ覗いた。
美雪「これ――」
恵「あ……」
　美雪がそのスヌードを見つけて呟く。美雪の視線をたどって、恵は布団から少し覗いたスヌードに気づいた。
美雪「これ、瀧川君に？」
恵「……うん」
　美雪がいたずらっぽく尋ねると、恵は少し赤くなって、観念したようにうなずいた。そしてそっと布団の中から編みかけのスヌードを取り出す。
美雪「瀧川君、絶対喜ぶわね」
恵「大丈夫、かな？」
　少し不安げに聞く恵を見て、美雪はおかしそうに笑った。
美雪「なんで心配してるの？」
恵「いや、なんか手編みって重いし……。でも私、買い物とか行けないから、こうするしかなくて」
美雪「なんか、早坂さんもそういうこと考えるんだね」
恵「え、いや、その……」
　恵はますます顔を赤くする。
美雪「大丈夫よ、絶対」
　美雪が力強く頷くと、恵はほっとしたように笑った。
美雪「でも、早坂さんとこんな風に恋バナができるなんて思ってなかったな」
恵「……私も、こんなことまた誰かに話すなんて、思ってなかった」
　二人の間に、穏やかな沈黙が流れる。
美雪「……女同士でしか話せないこと、また話してね」
恵「うん。ありがとう」
　二人は目を見合わせて楽しそうに笑った。

三十六　病院の廊下
　灯りの落ちた病院の廊下を恵が歩いている。
恵「うっ」
　恵は途中でよろけて手すりに掴まった。
恵「ハァ、ハァ」
　息を荒くした恵は、そのまま廊下に倒れこんだ。倒れたまま、苦しそうに胸元を握りしめる。
看護師「恵ちゃんっ」
　倒れた恵に気づいた看護師が、パタパタと駆け寄ってくる。
看護師「恵ちゃん、しっかり」
　看護師に続いて別の看護師や医師がやってきて、恵はそのまま看護師たちに取り囲まれた。

三十七　亮の下宿

朝、亮が目を覚まして携帯を見ると、午前三時に一件の通知が入っていた。通知を開くと、恵から一言メッセージが届いていた。

恵『ごめん、退院できなくなった』

亮はメッセージを見るなり、飛び起きて洗面所に向かった。そして素早く支度を済ませると、上着に袖を通しながら家を飛び出した。

三十八　病院の廊下

亮は病院の廊下を走って恵の病室に向かった。途中、すれ違う看護師に注意されたが、それにも気づかず亮は走った。

恵の病室の前にたどり着くと、亮は一度息を吐いてから、口元をキュッと結んでドアをノックした。

「コンコン」

恵「どうぞ」

部屋の中から恵の落ち着いた声が聞こえてくる。

「ガラガラ」

亮「早坂っ」

亮は勢いよく扉を開けて部屋に入った。

恵はベッドに寝たまま亮に視線を向けた。

恵「ごめんね、びっくりさせちゃって」

そう言うと、恵は天井に視線を戻す。

亮「そんなのいい。それより――」

亮が言葉に詰まると、恵は穏やかに笑った。

恵「大丈夫。ちょっと体調悪くなっちゃっただけだから。安静にしてればまた退院できるよ」

亮「そっか、よかった」

亮は心底安心したように呟くと、ベッドの横の椅子に座る。

恵「……でもごめん、クリスマスは、大掛かりな検査になっちゃった」

亮「謝んな。早坂が元気ならいつだっていい」

亮の言葉に微笑んで、恵はゆっくりとベッドの上で起き上がろうとする。亮が慌てて背中を支えて、恵は上体を起こした。そして恵は、ベッドの横の棚から赤い包装紙に包まれたモノをそっと取り出す。

恵「しばらく会えなくなるから、先に渡しておくね」

亮「え……」

恵に差し出されて、亮はそのプレゼントを驚きとともに受け取った。

亮「開けていい？」

恵は嬉しそうに首を縦に振る。亮は丁寧に包装紙を開けて

いく。
亮「これ――」
　出てきたスヌードを見て、亮は言葉を詰まらせた。その様子を見て、恵が慌てて口を開く。
恵「ご、ごめんね。買い物行けないから、あんまりいいもの用意できなくて」
亮「ううん。すっげー嬉しい」
　上ずった声で弁明する恵に、亮は大きく首を振った。
亮「これ、作ってくれたの？」
恵「そ、その、入院中はあんまりやることないし」
　照れて顔をそむけた恵に、亮は満面の笑みを向けた。
亮「ありがとう。大切にするよ」
恵「……よかった」
　亮は喜んでスヌードを首に巻いている。恵はうつむきながらも、チラチラとその様子を見ている。
恵「た、瀧川君、今日二限あるでしょ。そろそろ行かないと」
亮「え？　ああ、でもまあ、切ってもいいかな」
恵「ダメだよ。行ってきなよ」
亮「厳しいなぁ」
　亮は苦笑しながら立ち上がった。
亮「早坂のおかげで帰りはあったかいな。じゃあ、また」
恵「うん、またね」
　亮は嬉しそうに、首に巻いたスヌードに顔をうずめながら病室を出ていった。

三十九　河川敷
　亮は自転車で河川敷を走っている。河川敷の砂利のところで子供たちが走り回って遊んでいる。亮はその様子を眺めながら、嬉しそうに首元のスヌードに顔をうずめた。

四十　病院（恵）・大学（亮）
　十二月二十五日、クリスマス。
　恵は病院でさまざまな検査を受けている。
　亮は大学で講義を受けたり研究室で本を探したり、植物園で伊達と一緒に花の世話をしたりしている。
　二人は同じ時を、別々の場所で過ごしている。

四十一　河川敷
　午後十時半。
　人気のない暗い河川敷を、亮は一人で歩いている。
「ピコン」
　ふと携帯の通知音が鳴った。

恵『会いたい』
　携帯の画面に、一言それだけが表示される。そのメッセージを見るなり、亮は踵を返して走り出した。

四十二　病室
　亮が息をあげたまま暗い病室に入ると、携帯を握りしめて座っていた恵が亮に気づいた。
恵「来てくれてありがとう」
　恵はそのままゆっくりと体を動かして、窓のほうを向いてベッドに腰掛けるように座り直そうとする。亮が駆け寄ってきてそれを支えて、恵はベッドから足を下ろして座り直した。そして恵は隣に座るように亮を見ながらベッドをトントンとたたく。亮は促されるままにベッドに腰掛けた。
　二人の視線の先にある窓の外の木には、オレンジ色の電飾が巻き付き、二人の顔を照らしている。
恵「面会時間過ぎてたのに、よく来れたね」
亮「忍び込んできた」
恵「ふふっ。ごめんね、クリスマスのうちにどうしても会っておきたくなって」
亮「いいよ。呼んでくれて、嬉しかった」
　恵は亮の肩にそっともたれかかった。二人はそのまま、黙って窓の外のイルミネーションを眺める。
　亮は上着の内ポケットから、緑色の縦長の紙袋を取りだした。
亮「メリークリスマス」
　亮がその紙袋を差し出すと、恵は顔をパッと明るくして受け取った。
恵「ありがとう。開けていい？」
　恵が尋ねると、亮は首を縦に振る。
恵「きれい……」
　恵が紙袋の中に入っていた包みを開けると、中から桜をあしらったとんぼ玉のペンダントが出てきた。
亮「こっちむいて」
　亮に言われるがまま、恵は亮のほうに体を向けた。
　亮は恵の手からそっとペンダントを取ると、恵の首にかけた。丁度とんぼ玉が恵の胸の上にある。
　亮はまっすぐに目を見つめて、恵に言った。
亮「苦しい時は、これを握りしめて、俺のこと思い出して。独りじゃないって、待ってる人がいるって、ちゃんと思い出してほしい」
　恵は、とんぼ玉を握りしめてうつむいた。その手と肩が、小刻みに震え始める。恵の頬を伝って落ちた雫が、ポトリと

落ちて布団に染みを作った。
　声を押し殺して泣く恵の頭を、亮は自分の胸に引き寄せる。
亮の胸に顔をうずめた恵は、小さく声をあげて泣いた。
　恵の泣き声が落ち着くと、亮は少しだけ恵を胸から離した。
恵「私、今年が最後のクリスマスかもって思ってた」
　恵は亮の目を見上げて、ささやくように言った。
恵「でも、やっぱり生きたい。生きて、未来を見てみたい」
　亮は頷いて、恵の頬を伝う涙を拭う。
　二人はそっと目を閉じて、そのまま静かに唇を重ねた。

春

四十三　病室
　年が明け、春に差しかかる頃。
　ベッドの上に、少し痩せた恵が座っている。その胸には、とんぼ玉のペンダントが光っている。
「コンコン」
恵「どうぞ」
　ノックの音に返事をすると、美雪と菊池、亮が入ってきた。
美雪は袴を、菊池はスーツを着ている。
恵「二人とも、卒業おめでとう」
美雪「ありがとう」
菊池「ありがとう」
恵「秋田さんは院進で、菊池君は就職だっけ」
菊池「うん、寂しくなるね」
美雪「私は来年もよろしくね」
　扉を閉めて、亮が二人のあとから近寄ってくる。
亮「せっかくだし、三人の写真撮りますよ」
美雪「いいわねぇ」
恵「え、もっとちゃんとお化粧しておけばよかった」
　恵の言葉に一同が笑う。
亮「じゃ、並んでください」
　亮が携帯を取り出すと、美雪と菊池が恵の両脇に並んだ。
亮「はい、チーズ」
「カシャッ」
　シャッター音が鳴って、亮が写真を確認する。
亮「良い感じです」
美雪「ありがとうー」
菊池「お、いいねぇ」
　亮が見せた写真を三人が並んで見ていると、病室の扉がノックされた。

恵「どうぞ」
　不思議そうに恵が返事をすると、そろりと三回生の女子たちが三人入ってきた。
三回生女子A「すみません、私たちもご挨拶したいなと思って」
　その後について、無表情な伊達も入ってくる。
恵「ありがとう。そうだ、みんなで一緒に写真撮ろっか」
　恵がそう言うと、亮が病室の外の看護師を呼び止めて携帯を渡した。
看護師「撮りますよー。はい、チーズ」
「カシャッ」
　研究室生が集まった室内に、軽快なシャッター音が鳴り響いた。

＊　＊

三回生女子B「ありがとうございました」
美雪「お邪魔しました」
亮「また来るわ」
　しばらくワイワイと談笑した後、研究室の面々は帰っていった。それを恵は手を振って見送る。

　室内が静かになってから、恵は一息ついて後ろにもたれた。しばらく天井を見上げた後、ベッドの隣の棚に載っている香水を手に取る。
恵「あっ――」
「パリン」
　恵の手が一瞬震えて、香水が手から滑り落ち、床に落ちて割れた。思うように動かなくなり始めている手を、恵は呆然と見つめる。
「ガラガラガラ」
　恵の母がノックもせずに扉を開けて入ってくる。
恵の母「あら、どうしたの？」
恵「……お母さん」
　恵は手から恵の母に視線を移し、まっすぐに目を見つめて言った。
恵「お願いがあるの」
　恵の真剣な様子を見て、恵の母はまだ不思議そうにしていた。

四十四　植物園

　亮が、秋に植えた植物を眺めている。そこへ伊達がやってきて、亮に声をかけた。

伊達「これは、花をつけるかもしれないな」
　突然の声に驚きながらも、亮は嬉しそうに笑った。
亮「そうだな。お前のおかげだよ」
　亮の言葉に、伊達は表情を変えずに言う。
伊達「いやぁ、お前の頑張りだよ」
　驚いて亮が振り向くと、伊達は亮を気にも留めずに帰っていった。

四十五　病院の屋上

　恵が病院の屋上のベンチで景色を眺めている。ベンチの前には、プランターに花が植えられている。
　そこへ亮がやってきて、恵に声をかける。
亮「今日はいつもより元気そうだな」
　恵は亮を振り返って、後ろの太陽に目を細めた。
恵「私はいつでも元気だよ」
　亮はそのまま歩いてきて、恵の横に座った。
亮「早坂からもらった種、もうすぐ花が咲きそうだよ」
恵「ホントに？　ウソじゃない？」
亮「こんなウソつかねーよ」
恵「よかったぁ」
　恵は嬉しそうに空を見上げた。
恵「実はね、お医者さんにお願いして、一週間だけ退院させてもらえることになったの」
亮「えっ？　いつから？」
恵「明後日から」
亮「明後日から？　じゃあ、花が咲いたら見られるんだな」
　亮は恵の両肩を掴んで、勢いよく聞いた。その様子に、恵がおかしそうに笑う。
恵「瀧川君がこれまで、大切に育ててくれたおかげだよ」
　亮は恵の肩から手を放して、両腕をあげて伸びをした。
亮「頑張ってよかったー」
　心底喜ぶ亮を、恵は幸せそうな顔で見つめる。
恵「明後日の正午に、花壇の前で会おうね」
亮「おう」
　恵が小さな小指を差し出すと、亮が小指を絡めて二人は指切りをした。

四十六　病室

　仮退院当日。外はあいにくの大雨で、昨日の晩から降り続いていた。
　淡いオレンジのワンピースに着替えた恵が、ベッドの上でメイク

している。
「ガラガラガラ」
恵の母「あらあら、今日は入念ね」
　ノックせずに入ってきた恵の母が、恵の様子を見てニヤニヤする。
恵「あんまり茶化さないで」
恵の母「はいはい」
　真剣にアイラインを引く恵の横で、恵の母は呆れたように笑いながら恵の荷物をまとめている。

四十七　大学の正門前
　正門の前にタクシーが止まり、その中から傘を差して恵が降りてくる。
恵の母「かなり雨も強いけど、一人で大丈夫？」
恵「大丈夫」
　車の中から心配そうに声をかける母親に、恵は笑って言った。
恵「じゃあ、行ってくるね」
　恵は手を振って、大学の中に入っていった。

四十八　植物園
　恵は、植物園の入り口までたどり着いて、足を止めた。深呼吸をしてから、少し緊張した面持ちで足を踏み入れる。
　植物園の花々は、強い雨に打たれながらも、力強く咲いている。恵は懐かしむようにそれらをじっくりと眺めた後、傘を畳んでゆっくりと温室の中に入っていく。
　恵が奥の花壇までたどり着くと、そこにはまだ亮の姿はなかった。恵は花壇の前にしゃがむと、そこに植えられた植物に話しかけた。
恵「よく頑張ってくれたね」
　恵の視線の先には、小さな蕾をパンパンに膨らませ、今にも咲きそうな植物がある。恵はそれをじっと眺めた後、手首の時計を見た。
　十二時三分。
　約束の時間を少し過ぎているが、まだ亮が来る気配はない。恵は待ち遠しそうに植物を眺めた。

＊　＊

　しばらく経って恵が時計を見ると、今度は十二時三十分になっていた。恵は携帯を取り出して、亮にメッセージを送る。

『大丈夫？　何かあった？』
それだけ送って、また恵は携帯をしまった。

＊　　＊

それからいくら待っても亮はやってこない。恵はチラチラと通知を確認するが、携帯の画面には何の通知もない。
恵がもう一度携帯の画面を確認すると、そこには十五時と表示されていた。
「ガタンッ」
美雪「早坂さんっ」
そこへ、温室の扉を勢いよく開けて、ずぶ濡れの美雪が走ってきた。恵が振り返ると、美雪は両ひざに手をついて息を整えながら、切れ切れに言った。
美雪「大変、瀧川君が……、川でおぼれた子供を、助けようとして、今病院に……」
恵「――――――え？」
恵は呆然と立ち尽くした後、ふらりと歩き出した。そのまま駆け出し、まだ息をあげている美雪の横を通り過ぎる。
美雪「早坂さん、待って」
美雪の制止も聞かず、恵は傘も差さずに土砂降りの外へと飛び出した。
バシャバシャと少し走った後、強い雨に打たれながら恵が立ち尽くす。
恵「うっ」
ぐらりと体を傾けた恵は、そのまま胸を抑えて雨が弾ける地面に倒れた。
美雪「早坂さんっ」
それを見つけた美雪が悲痛な声をあげて駆け寄ってくる。
美雪に何度も名前を呼ばれる中で、恵は胸元のとんぼ玉のペンダントを強く握りしめたまま、意識を失った。

四十九　病院

病院の別々の処置室で、恵と亮が応急処置を受けている。二人とも意識はなく、人工呼吸器をつけられている。二人の周りで、大勢の看護師や医師がせわしなく動いている。

五十　植物園

恵と亮が、並んで花壇の前にしゃがんでいる。
恵「きれいに咲いたね」
恵の視線の先には、小さなオレンジ色の花がいくつも咲いている。

恵「これまで世話してくれた、瀧川君のおかげだね」
恵はその小さな花をそっと触った。
恵「忘れな草はね、本当は青とか白とかしかなくて、オレンジ色は今までなかったんだよ。このオレンジ色の忘れな草は、世界に一つだけしかないの。だからね――」
恵が横を振り向くと、そこにいるはずの亮がいない。

五十一　病室
恵は病院のベッドの上で、パチッと目を覚ました。その右目から、大粒の涙がひとつこぼれる。
恵が目を覚ましたことを喜ぶたくさんの声が、遠くに聞こえる。

五十二　病院の屋上
一か月後。
車椅子に乗った恵が、目の前のプランターに植えられたオレンジ色の忘れな草を眺めている。
恵「私、この花に自分の名前つけるのやめます」
花岡「……いいんですか？」
恵の少し後ろに立つ花岡が穏やかに言った。
恵「いいんです。それよりも、大事な名前ができたから」
恵は胸元のとんぼ玉をそっと触って、空を見上げた。
そんな恵の様子を、花岡は目を細めて眺めている。
恵「この花の名前は……」
恵は花の名前を大切そうにそっと呟いた。

fin.